

「一人一人を祝福するために」

使徒言行録 3：11～26
エゼキエル書 18：30～32

2023年7月2日
野村 友美 師

<先が見えない状況の中で>

7月最初の日曜日になりました。今年がもう半分過ぎた、ということになりますね。月日の流れは本当に早いものだと、しみじみ思われます。

特にこの何年かは、社会の状況が目まぐるしく変わり続けていますから、なおさら早く感じるんじゃないでしょうか。

新型コロナウイルスの流行も、ロシアとウクライナの戦争も、世界的な経済不況も、未だに終わりが見えてきません。じわじわと不安で重苦しい、そんな空気に覆われ続けて、誰もが疲れているように思います。

どうなるのか、どうしたらいいのか、先が見えない不安ほど私たちの心を疲れさせるものはありません。だからいろんな情報が飛び交って、何を抛りどころにすればいいのかわからなくて、それぞれが自分の信じたものにしがみついて、何とか安心しようとしている。そんな社会状況を生きている今だからこそ、私たちは改めて信仰者としての自分たちの抛りどころを確かめる必要があるでしょう。

神様の掟、律法の中でいちばん重要なのはどの掟ですか？と質問された時、イエス様はこうお答えになりました。

『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』

これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。

『隣人を自分のように愛しなさい。』

律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。(マタイ22：37-40)

心を尽くして精神を尽くして思いを尽くして、不完全な私たちの精いっぱい、神様を自分の主人として愛すること。その神様が愛しておられる存在として、人を自分と同じように大切にすること。聖書全体がこの二つの掟を基礎にしていると、イエス様が教えておられます。

私たちの抛りどころ、私たちの基礎もここにあると言っていいでしょう。変わり続ける状況の中で、出会わされるいろんな場面で、何よりもまず神様を自分の主とすること。その神様の愛に従って自分も人も愛することを、私たちの基礎に据えていることができますように、祈り求めています。

さて、今日の聖書の場面で使徒ペトロが語っていることも、やっぱりこの二つの掟の第一、神様を主として愛する生き方に一人一人を招いています。

<神殿で語るペトロ>

ペトロとヨハネがエルサレム神殿の境内に入って行った時、そこにいた人たちはものすごくびっくりしました。2人と一緒に神殿に入ってきた人が、

みんなよく知っていて、しかも絶対にそこにいるはずがない人だったからです。

その人は生まれつき足が不自由で、毎日神殿の門の前で人からの施しを受けていました。いつも神殿に来ている人たちにはお馴染みの顔で、彼に施しをしたことがある人もその場にはたくさんいたでしょう。

ずっと見てきてよく知っている、あの歩けないはずの人が、自分の足でしっかり立ってペトロたちと一緒にすたすた歩いて神殿の境内に入ってきたんです。

「そんな、まさか！」と言いたくなるようなことが目の前で起こったとき、皆さんだったらどうするでしょうか？きっとほとんどの人がまず自分の目を疑って、近寄って確かめたくなるでしょう。そこにいた人たちも、そうでした。

人々は、ソロモンの回廊と呼ばれる場所にいるペトロたちのそばに続々と集まってきました。

どう考えてもおかしい、あの人は確かに生まれつき歩けなかったはずなのに。一体何が起こったんだ？この二人連れは、彼に一体何をしたんだろう？不思議がる人々に向かって、ペトロは話し始めました。

この人が歩けるようになったのは、私たちの力や信仰のせいじゃない。イスラエルの神様が栄光を与えて遣わしたメシア、あなたたちが拒否して殺して、でも神様が復活させたイエス様の方だ。

ペトロは最初にそう宣言しています。

イエス様の名が、つまりイエス様という存在そのものが、この人を強くした。イエス様を「私の救

い主」と信じて受け入れる信仰が、この人を癒した。イエス様こそ私たちの救い主なんだ、とペトロは人々に告げ知らせたんです。

当時のイスラエルでは、病気や体の不自由さは罪の罰だと考えられていました。本人かその親が犯した罪の責任が、この人を歩けなくしている。動かない足は、この人が神様から拒否されている証拠だ。そんな風に、周りも本人も考えていました。もちろんそうじゃないことを、現在の私たちは知っています。でも当時の人たちにとってはそれが常識で、変えられない「当たり前」の価値観だったんです。

だから「イエス様の名によって歩けなかった人が癒された」というこの出来事は、イエス様が罪を赦す権威を持っておられるということ、当時の人たちにわかりやすく伝えています。

罪を赦す権威は神様にしかないことを、もちろんイスラエルの人たちは知っていましたし、とても大事なこととして考えていました。

だからこそ、この癒しの出来事は「イエス様こそ神様から遣わされた人、メシアだ」と人々が疑う余地もないほどはつきりと証明したんです。

この時ペトロの周りに集まってきていた人たちは皆、ユダヤ教の祈りの時間に合わせてわざわざ神殿まで祈りに来ていた人たちでした。先祖代々の信仰を大事に守って、神様の民である自分たちの民族に誇りを持って神様からの祝福を期待していた人たちです。聖書の預言者たちの言葉を大切にして、神様がイスラエルに約束してくださった救い主、メシアがやって来る日を彼らは心から待

ち望んでいました。信仰深い、と他人も自分自身も認めるような人々がそこに集まっていたんです。そういう人たちに向かって、ペトロは厳しく繰り返しています。あなたたちの罪が、メシアを十字架につけた。あなたたちが拒否して、ローマ帝国に引き渡して殺したあのイエス様こそ神様が遣わされた救い主だったんだ。そのことを知って、自分たちがしたことを認めて悔い改めなさい。

このペトロの言葉は、人々にとってはまさに自分たちの常識と価値観をひっくり返される「そんな、まさか！」でした。

イエス様がイスラエルの指導者たちに捕らえられて、ローマの役人に引き渡されて十字架刑で殺された時、エルサレムにいた人々はそれが間違っているなんて思いもしませんでした。

イエスは私たちが期待したようなメシアじゃなかった。イエスが目指しているものは、私たちが目指したいものじゃなかった。私たちが願い続けてきた理想を実現してくれないんだから、イエスは私たちのメシアじゃない、間違った偽者だ。

そう考えて、イスラエルの人々はイエス様を拒否したんです。あの十字架刑は彼らにとって、イエス様自身の罪が招いたこと、イエス様の自業自得でした。悪いことをしたどころか、自分たちは神様の民として正しいことをした、と彼らは心の底から思っていたんでしょう。そんな人々にペトロは「そうじゃない、イエス様を十字架で殺したのは他でもないあなたたちの罪だ」と突きつけました。

神様を愛して求めているつもりで、自分たちの理想を愛して求めている。神様の思いに従っているつもりで、自分たちの思いに従っている。

だからあなたたちは正しいつもりで間違えて、自分たちが待っていたはずのメシアを拒否して殺してしまったんだ。ペトロの言葉は、イスラエルの人々の間違いを容赦なく指摘しています。

でもペトロの目的は、人々の罪を責めて裁くことじゃありませんでした。あなたたちが間違えたのは、あなたたちが無知だったからだ、とペトロは続けています。いつの間にか神様の代わりに自分が主人になっている、そんな自分たちの姿を知らなかったからだ。だから今、その間違いを認めて神様に向き直りなさいと、ペトロは人々に勧めました。

モーセやサムエル、聖書の預言者たちが予告していた通りに、神様は前もってあなたたちを赦そうと決めておられて、メシアであるイエス様を遣わしてくださった。アブラハムに約束された通りに、神様はあなたたちを祝福したいと今も願っておられる。だから怖がらなくていい、勇気を出して悔い改めなさい、とペトロは愛する同朋たちを一生懸命に励ましているんです。

<一人一人を祝福するために>

今日のメッセージの最後に、ペトロは人々にこう宣言しています。

「それは、あなたがた一人一人を悪から離れさせ、その祝福に与らせるためである。」

この言葉もまた、当時の人たちの価値観をひっく

り返す「そんな、まさか！」でした。

一人一人、他の誰でもない「個人」という意識よりも、どの部族のどの家系に属しているか、誰の子なのかということが、イスラエルの人たちの拠りどころだったんです。でもイエス様が来られた今、血の繋がりとか民族が神様とあなたたちとを繋いでいるんじゃない、とペトロは告げ知らせます。

自分の間違いを認めて悔い改めて、神様に向き直って、イエス様を信じて頼ることだけが、神様と私たちを繋ぐのだ。そうペトロは人々に教えているんです。

民族とか部族とか家族といったひとまとめとしてじゃなくて、神様は私たち一人一人に目を注いで呼びかけておられる。一人一人と関りたいと願って、神様の方から一人一人に手を差し伸べておられる。そのことをペトロは最後に念押ししているんです。

一人一人が悪から離れて、祝福を受け取ってほしい。この神様の思いを、旧約聖書の預言者エゼキエルもまた、こんな言葉で伝えていました。

「それゆえ、イスラエルの家よ。わたしはお前たち一人一人をその道に従って裁く、と主なる神は言われる。悔い改めて、お前たちのすべての背きから立ち帰れ。罪がお前たちをつまづかせないようにせよ。お前たちが犯したあらゆる背きを投げ捨てて、新しい心と新しい霊を造り出せ。

イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ』と主なる神は言わ

れる。」（エゼキエル18：30-32）

私たち人間は多かれ少なかれ、自分たちが生れ育った文化や価値観を自分の基礎にして生きています。そしてその中で、神様の正しさよりも自分の思う正しさを選びとってしまう、そんな無知と弱さもまた、私たちの誰もが抱えているものでしょう。だからこそ今日のペトロの言葉は、そして預言者エゼキエルの言葉は、古代イスラエルの人たちだけじゃなくて、この言葉を受け取る一人一人に呼びかけています。

悔い改めて立ち帰りなさい、こっちを向きなさい、と辛抱強く待っておられる神様の声を、今日の聖書の物語が私たち一人一人に届けています。あなたを祝福したいんだ！と願って、一人一人を招き続けていてくださる神様に私たちが応え続けていくことができますように。

1日1日、ひと時ひと時、神様を主とする思いに向き直り続けることができますように、救い主イエス様の名によって、ご一緒に祈ってまいりましょう。

お祈りいたします。